

第二章 一九世紀の水辺地域調査プロジェクトとロシア南方のイメージ

望月 哲男

一・水辺地域調査プロジェクトの概略と本稿の狙い

地域のイメージ形成史を知るのに、外部の訪問者による観察の記録は、有益な資料である。手紙、日記、報告書、文学作品、絵画、種々の映像・音声資料といった形で残される記録は、しばしば複合的な印象を与えてくれる。ある時期にある地域が発している多元的な情報と、そこから何かを選択して解釈し、表現へと加工する、個人の心性や教養や気分が、オーバーラップして見えてくるのだ。

通例そうした観察の記録は、個別偶然的に作り出されるが、時にそれが一つの企図のもとに、集合的に作り出されることがある。ソ連期の一九三三年に、マクシム・ゴーリキーを代表とする一二〇人の作家が行った白海―バルト海運河建設現場集団視察の記録は、そうした例の一つである。一九世紀にも、より小規模ながら、類似の企画が実行された。一八五六年に行われた、一群のロシア作家による水辺地域の調査プロジェクトがそれだ。本稿は、このプロジェクトの成果のうち、帝国南部に関するものの一部位について概略を整理し、特徴的な文章を紹介しながら、こうしたプロジェクトから生まれたテキストが、南方表象にとって持った意味を考えることを目的とする。

このプロジェクトは、当時ロシアの海軍を司り、地理学協会の長も兼ねていた青年大公コンスタンチン・ニコラエヴィチ（一八二七―九二）の提唱で行われたもので、海岸や河岸など水辺地域から水上生活に慣れた新兵を募ろうという、海軍強化企画の予備作業であったと同時に、地域住民の民俗誌学的な

特徴や生活実態を把握して大改革に向けての国家政策に役立て、また海軍省の機関誌『海事論集（モルスコイ・ズボールニク）』の誌面を充実させて海軍軍人および国民の意識向上に資するといった、複数の狙いがあった¹⁾。

実際『海事論集』の創刊者である海軍提督リトケ (Fedor Petrovich Litke: 一七九七—一八八二) は、海軍士官候補生の時にダンツィヒの砲撃で腕を示した優秀な軍人であると同時に、名高い地理学者であり、一八二六—二九年、世界周航調査の際に行ったベーリング海沿岸の諸島や半島の克明な調査が世界的に評価されて、ペテルブルグ科学アカデミー準会員、後名誉会員となり、さらに会長（一八六四年以降）を務めている。一八四五年のロシア地理学協会の設立にも中心的な役割をほたし、名誉的な会長役の大公のおかげで、協会の実務を取り仕切る副会長を務めた。このリトケこそ、一八三二年から少年期のコンスタンチン・ニコラエヴィチ大公の教育係を務めた人物であった。すなわち地理学協会にも、四八年創刊の『海事論集』にも、そして大公自身にも、リトケの軍人・地理学者としての夢と情熱がたつぷり注ぎ込まれていたと見て間違いない。海軍のリクルート戦略と文化人類学的な調査と文学趣味とを一緒にしたような五六年のプロジエクトは、そうした夢の興味深い展開のように思える。

この時代のロシア帝国では、広大かつ多様な自国の地理風土を具体的に認識し、国民の生活環境や、複数民族が交わる地域における宗教・文化的な状況を知ることへの関心が高まっていた。四五年に設立された上記の地理学協会も、カフカス、イルクーツク、ヴィリニウス、オレンブルグ、キエフ、オムスクに支部をつくり、地理学、民俗誌学、宗教学、言語学、フォークロア研究などの領域で活動していた。またゴンチャロフの日本紀行に代表される旅行記ジャンル自体も、人気を博していた。

一方でこの時代は、クリミア戦争の敗北と新しい皇帝の戴冠の直後、六〇年代の農奴解放を初めとする大改革の前夜にあたり、生産・消費活動、交通・物流の加速に促される形で、農民や漁民の生活に大きな変化が生じ始める時期でもあった。実際作家たちの観察記録にも民俗学的な類型への関心と、時代とともに変化する現実生活の諸相への関心が、二重写しになっている。当時の『海事論集』自体が、クリミア戦争の経緯や海軍の改革を論ずるのみでなく、兵士への体刑の廃止論や、教育制度改革、裁判制度改革など一般政治的問題にも関与するリベラルな論壇となっていたが、大公の企画はまさにそうした器にふさわしいものだったと言えるだろう。

水に関係した地域の調査ということで、対象は白海岸の諸地域、ヴォルガ、ドニエプル、ドンなど大河川の流域、カスピ海岸、黒海岸など、広い地域に及び、動員された作家も、力のある若手を中心に総計九名に及んだ。具体的な地域区分と担当した作家は、以下のようである。

北方河川、白海、ラドガ・オネガ湖 S・V・マクシーモフ

ヴォルガ流域 A・N・オストロフスキー（上流域）、A・A・ポテーヒン（中流域）、A・F・ピー

セムスキー（アストラハン、カスピ海）

ウラル川、オレンブルグ M・L・ミハイロフ

ドニエプル、ドニエストル A・C・アフナーシエフ、リュジヴィンスキー

ドン河、アゾフ海 N・N・フィリツポフ、A・M・ミハイロフ

ドンとドニエプルの間のステップ G・P・ダニレフスキー

この調査プロジェクト全体の概略と、ヴォルガ沿岸地域の調査の様相について、筆者はすでにヴォルガ表象との関連で、別の形で発表した³。本稿では、この調査プロジェクトがこの時期のロシアの南方表象の問題にどうかかわったかという観点から、上記調査メンバーのうちピーセムスキーとダニレフスキーの成果を検討する。彼らが残した報告テキストのテーマをまとめ、同時に一部を翻訳紹介することで、一九世紀中期の作家たちがロシア南方にむけた視線の特徴を知る一助としたい。なお、ピーセムスキーについては知られる限り調査への関与や日程についても概述するが、ダニレフスキーの調査への関わりや調査実態については、資料の不足からここでは詳細にわたらず、テキストの紹介にとどめる。

二. 南方調査の二例から

二― アストラハンとカスピ海 アレクセイ・ピーセムスキー

① アレクセイ・ピーセムスキー（一八二一―一八二）と調査プロジェクトについて若干

経歴 アレクセイ・ピーセムスキーは作家フォードル・ドストエフスキーと同じ一八二一年、ロシア

北方のコストロマ県チュフロム郡の領地ラメニエに退役軍人の子として生まれた。コストロマのギムナジウム、モスクワ大学数学科で学んだのち、コストロマ県の国有財産管理局、さらにモスクワ国有財産管理局に勤務。四七年に退職後、五〇年に再度コストロマ県の官吏になる。

同時期に劇作家オストロフスキーの誘いで、モスクワの雑誌『モスクヴィチャーニン』に接近し、四〇年代から始めていた創作に本格的に取り組みはじめた。初期作品は社会病理や風俗への関心が強い「自然派」的作風を示していて、中編『ふとん（ぐず男）』（一八五〇）がその代表。一方で『出稼ぎに行った男』（一八五二）、『森の主』（一八五三）、『大工のアルテリ』（一八五五）など、農民生活に取材した短編も手がけている。『苦い運命』（一八五九）は、農民生活の暗黒面を描いた戯曲である。青年カリノヴィチの恋愛と勤務上の葛藤を描いた長編小説『千の魂』（一八五八）が代表作とされる。一八六〇年から六二年半ばまで、雑誌『読書文庫』の編集主幹をつとめ、論壇の新勢力だった反体制的「ニヒリスト」相手に論争したほか、アストラハン地域の調査報告の一部もここに掲載した。アンチ・ニヒリズム小説に『荒れ騒ぐ海』（一八六三）がある。

プロジェクトとのかかわり ピーセムスキーは、ヴォルガ中流域調査のポテーヒンと同じく、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公自身がプロジェクトに招いた作家だった。当時すでに農民生活のテーマを得意とし、民衆語の知識も持っていたうえに、短編『大工のアルテリ』を、クロンシタットに停泊中のフレゲート艦リューリック号上で、大公に朗読して聞かせた経緯があった。当時まだ、御料地局勤務の九等文官だったピーセムスキーの派遣に、はじめ当局は難色をしましたが、二度目の要請で許諾した。ピーセムスキーは、一八五六年一月九日から一月九日までの予定で、アストラハンおよび沿カスピ海地域の調査に派遣され、同年二月後半にはアストラハンに着いている。同年四月ないし五月初頭にはバクー旅行に出かけた。ただしアストラハンに戻った後、熱病と鬱病にかかった彼は、九月にはモスクワに帰還している。この病気の件では、オストロフスキーはじめ同僚作家たちが親身に世話をしたが、

結局持病となり、後の死の原因ともなったと言われる。アストラハンとカスピ海旅行の記録は予定通り海軍省の『海事論集』に掲載されたが、テーマ別のルポルタージュ類はのちに『読書文庫』に発表された。

成果 このプロジェクトから生まれたピーセムスキーの文章には、以下のものがある（傍線部が、本稿で触れる作品）。

「旅行記録（アストラハン）」（『海事論集』一八五七年二月）

「アストラハンにおける黒海艦隊員の歓迎式典」（『海事論集』一八五七年四月）

「海の旅行 一・狼の州 二・バクー 三・チュクIIカラガン半島とアザラシ島」（『海事論集』一八五七年四月）

「アストラハンのアルメニア人（旅行記録より）」（『海事論集』一八五七年一〇月）

「タタール人（旅行記録より）」（『読書文庫』一八五八年一月）

「カルムイク」（『読書文庫』一八六〇年一月）

訪問地 ピーセムスキーが調査の基地としたアストラハンは、ヴォルガがカスピ海に流れ込む手前の巨大な三角州にある町で、古くから水上および陸上交通の要所として栄えてきた。広く水域に開けた立地、夏季と冬季の気温差が大きい気候、諸民族文化の混雑を示す景観など、ロシアの都市のうちでもエキゾチックな要素に満ちている。本来、キプチャク・ハン国の継承国家のひとつであるアストラハン・ハン国の首都で、一六世紀にイワン雷帝によってロシア帝国に併合された。一七世紀のステンカ・ラージンの乱の際には反乱軍に占拠され、のちのピョートル大帝の時代には、ペルシアはじめ南方諸国と対

峙する軍事基地として整備された。ロシア帝国のアジアに開けた窓として、中東や南アジアとの交易も盛んで、ヴォルガ流域、コーカサス、イラン、インド、中央アジアなどの商人が訪れた。一五世紀に北部ロシアからインドまで旅をしたトヴェーリ公国の商人アフナーシー・ニキーチン（旅行記『三つの海を越える旅』の作者）もここを通った。作家で民俗学者のミハイル・プリーシヴィンも、未来派の詩人ヴェリミール・フレーブニコフも、アジア的ロシアを体现するこの町から大きなインスピレーションを受けている。現在でもロシア人のほかにタタール人、カザフ人、アゼルバイジャン人、アルメニア人、ウクライナ人などが居住しているが、ピーセムスキーが訪れた一九世紀中期にも諸民族の混住の雰囲気が高く、その記述にはコサツク、タタール人、アルメニア人、ペルシア人、市外に住むカルムイク人などの外貌と、それぞれの生活風俗の描写が大きな場所を占めている。

続いて訪れるバクーは、カスピ海西岸のアプシエロン半島に位置する町で、海岸に広がる美しい景観と、鉱泉、温暖な気候の中を時々吹き抜ける強い北風を特徴とする。古くからカスピ海交易の中心として、また石油の産地として栄えてきた。住民であるアゼルバイジャン人は、コーカサスのダゲスタン系の基幹住民にイラン系とトルコ系住民が加わって形成されたという。一二世紀にシルヴァン・シャー国の首都となったが、代々トルコ、イランの侵攻を受け、独立した政権が維持しにくかったこの地を、ロシア帝国が一九世紀初めに併合した。ピーセムスキーがこの地を訪れる一〇年前の一八四六年に、大掛かりな油井の掘削が始まった（のちにここにアルフレッド・ノーベルが巨大な石油会社を作ることになる）。宗教はイスラームをベースとするが、他の宗教の信者も居住していて、ピーセムスキーもゾロアスター教の寺院に注目している。

以下ではピーセムスキーの報告のうち六点について、まずそれぞれの主な話題やテーマを略述し、続いて南方イメージの観点から重要と思われる箇所について、具体的なテキストを掲示する。

② テキスト紹介

a. 「旅行記録（アストラハン）」³

【梗概】

一八五六年二月、初めてアストラハンへ旅をしたときの印象期。ヴォルガ岸のサラトフから、アストラハンの町へ到着するまでを記述している。旅人の目に映る殺風景なヴォルガ下流域の描写に始まり、道中見かけたコサツクの村の様子から、ヴォルガ・コサツクの複数の起源論や、コサツク建立の教会の火事と再建を巡る話へと展開する。さらに冬期に陸路を旅することの困難さ、ステップ人気質、遊牧民の外見といったテーマでの考察が続く。やがて御者との間で交わした、かなり偏見を含んだカルムイク人談義が紹介され、「帝国」的な観点からの南方植民論が語られる。さらに話題は歴史へと展開し、イワン雷帝のアストラハン・ハン国攻略史、およびステンカ・ラージンの乱の経緯に関する長い記述が挿入される。最後に叙述は目の前の光景へと回帰し、川越しに真っ先に目に飛び込んでくる教会や石造りの庁舎や商人の家を含んだ（著者によれば他のヴォルガ岸の町と差のない）アストラハンの町の遠景と、アジア的混沌というべきその近景が、対比的に描写される。結末は、到着した粗末な宿と豪勢な夜食の描写である。

【テキスト】

***旅人の見る殺風景なヴォルガ下流域**

サラトフを出ると、私はもう掛け値なしの南東地方にいた。太陽はちょうど我々のところの三月末のような照り方をしている。船で行くヴォルガの水面では薄氷がかすかな音を立て、左右には氷に覆われた水と魚釣り用に開けられた穴が、ほとんどむき出しの姿をさらしている。我々の住む上流域の諸県にあるような、規則正しく配置されてびっしりと家が建ち並ぶ村々の代わりに、目に入るのは切り立った崖の上に立つ土壁の小さな小屋の群と、周囲の網垣で囲った屋根もない家畜寄せ場だ。見える限りの村の教会の中で石造りのものは一つしかなかった。夕日に照らされたところをみれば、確かに画趣をそそるが、まあ、ただそれきりのことである。

***偏見的カルムイク談義**

「あれはいったい何という人種だ」私は御者に聞いた。

「カルムイク人ですよ」相手は答える。

「やけに汚らしい連中だなあ」

「きれいなはずがありますかい」御者が言い返す。「ステップの獣同然の暮らしをして、死んだ動物の肉を食らっているんですから。ガキどもなんか、まるで小鬼みたいに、真っ裸のすすけた姿で駆け回っていますなあ」

「おまえ、ここの者じゃないのか」

「いいや、この人間なんてとんでもねえ。上流の生まれですよ」

「どうやら、カルムイク人が嫌いなようだな」

「どうして好きになれますか。野蛮な連中ですよ」御者は答えて「中身は単純ですがね」と言い添える。

「単純？」

「単純です。今すぐに連中の小屋を訪ねてごらん下さい。旦那方でも我々の仲間の百姓でもかまわない。そうすりゃあ連中はすぐに家にある一番おいしい食い物をそっくり出して振る舞いますよ。俺なんか知らない間に馬の肉を食わされて、その後一年も吐き気がしました」

「街道で暴れるようなことはあるのか」

「ありません。馬やほかの家畜を盗むのはえらくうまくて、お互いの間でもやりますが、我々御者仲間でも、ちょっとぼんやりしていると、馬の首に石けんを塗って、綱を外して盗んでいきますわ。そうしてステップへ追い放たれたら、もういくら探したって無駄ですな」



*「帝国」的南方植民論

「するとこれが」と私は悄然と考えた。「寒いペテルブルグであれば魅力的に思えた、われらが恵ま

れた南東の地なのか。ステップと馬群と遊牧民の世界たる、広大無辺なヴォルガの地なのか！」きつと夏にはすべてが活気づくのだろうが、今は貧弱でみすぼらしく、何よりも荒涼としている。この荒野を活性化するためには、たくさんの労働が必要だ。たくさんの人々を、それも別種の人々を移住させなくてはならない。ステップの民はおそらく自分で改善する力を持たないだろう。連中に発破をかけてやらねばならない、しかも何をするのか教えなくてはならない……。

* 町の近景Ⅱアジア的混沌

小さな木造の粗末な家々は、大半が塀の陰に隠れているが、通りに露出しているのは、窓も閉ざされて煤だらけの、見栄えのしない瓦屋根の家ばかり。石造りの建物には、同じように見栄えのしないバルコニーというかむしろ回廊が付いているが、みな必ず内庭を向いている。人気のないステップを旅してきた私には、とてつもなく人口の多い都市か、それとも市場にやってきたような気がした。人間が通りにひしめいているのである。しかもその衣装の多様さはどうだ——毛皮帽子（マラハイ）、ペルシア帽子、ラシヤ外套（アルミヤーク）、寛上衣（ハラート）、楯襟服（チューハ）！まるでバベルの塔が建つてみたいに、あちこちからいろんな言葉の音が飛んでくる。しかもどの言葉にもルツイといった音が入っている気がするのだ……。

b. バクー⁴

【梗概】

同年春にカスピ海經由でバクーを訪れたときの観察記録。初めての海の旅の爽快さや多少の恐怖、アザラシの印象などに交じって、かつて一つの海をなしていたカスピ海と黒海が、コーカサス山地の隆起によつて分断されたという、地質学的な仮説が紹介される。バクーの町はまずそのおとぎ話的な外見が驚きとともに紹介され、続いて、ロシアとペルシアの狭間で展開されたその悲劇的な歴史が記述される。町の近景は、遠景との落差を基調に語られ、伝説の「乙女の塔」、水底の城、キヤラバン・サライなど、名所が紹介される。オリエンタリズム風好奇心満々のピーセムスキーは、石油の臭いに反応し、拝火教徒の僧院で礼拝を見物し、さまざま楽器、そして町中にあふれる陽光を、感嘆の目で見ている。

【テキスト】

*カスピ海と黒海がつながっていた話

かつてカスピ海が黒海とつながっていたという説は、今日では全く疑う余地はない。クバーニからドン軍団のしめる全土を経てカスピ海まで上ってくる道程の全域で全く同じ種類の貝殻、同質の地層がたどれ、至る所に大小の塩湖があるという事実は、この地域一帯がかつて海底であったことを明瞭に物語っている。とすれば、水はどこに行つたのか？ 蒸発したというのでは不十分だ。この興味深い事実についてベールと話してみた。彼の考えでは、そもそもカスピ海が黒海とつながっていたのは北の部分だけだったが、火山活動によつてカフカス東部の山岳が隆起すると、反動で沈降が起こつて、いまのカスピ海南部に当たる部分が形成された。そこに水が流れ込んだ結果、浅かった部分はさらに浅くなり、干上がつて、海が別れたという。

*エキゾチックなバクーの印象

振り返った私は思わず叫び声をあげそうになった。まるで何か東洋のバレエを演じている舞台を思いがけず目撃した人のような、そんな印象を覚えたのだ。弓のように弧を描いた入り江を思い浮かべていた。さほど遠からぬところに要塞があり、その上方には、岸からせり上がるようにしてカフカスの山小屋のような、真っ白で覆いのない小さな家々が立ち並び、ピラミッドのごとき形をなしている。そしてそのつぺんに、高いミナレットを備えたハンの宮殿が建っているのだ。おまけに大気ときたら、どこであれこれほどすがすがしい空気を味わえるところはない。いくら胸に吸い込んでも飽き足らないくらいである。初めは私の個人的な感想かとも思ったが、しかし聞いてみると他の人たちも同じことを感じているようだ。山から吹き下ろしてくる時には乾いていた風が、海上で湿気を帯びて柔らかくなり、石油のガスまで含むのである。こうした気候のせいでも、ペルシア人たちはバクーを「我らの心」と呼んでいる。我が国のアストラバード巡洋艦隊にとつても、バクーは保養所のような役回りだ。熱病に冒されて憔悴しきった水兵たちが、アストラバードからバクーに来ると、一週間で具合がよくなるのである。

*近景で変わる印象



バクーのすばらしい第一印象は、町の中に入るとすっかり失われてしまう。アジアの町を訪れたことのない者には、バクーの町並みがどのようなものか想像できないだろう。我が国の商店街の裏側の薄汚い小路を思い浮かべても、まだ足りない。我々は窓のない壁の間を二人ずつ並んで進んだ。三人並ぶのは無理だったろう。上を見上げると空が細い筋になって見えるだけ。足下は畜糞だらけである。へとへとに疲れてやつと昔の権力者の住居に着いた。かつてこの中がどうであったか、もはや偲ぶかげもない。母屋は今では兵舎となり、メチエーチには武器や砲兵隊の備品が保管されている。ただし外観はただぼそつくり保たれていた。宮殿の周囲をめぐる回廊と彫刻が施されたいくつかの入り口は、見事なものであった。見るからにギリシア人の手になるもので、ペルシア風とは全く違うのだ。だが、思わず息を呑んで数分間立ち尽くしてしまうような最高の絶景は、テラスからの眺めだった。ここから見るバクーの町は、棚田のようにだんだんと下つて、郊外に向けて広がっていき、最後に海へと達する。船が点在するその海は、遠くで水平線と溶け合っている。そしてこのすべてが、明るい陽光を浴びたように輝いているのだ。

*** 拝火教徒の僧院（インド商人の遺産）で礼拝を見物**

スルハナ集落の近くに石油と炭化水素がたっぷりと染みこんだ土壌があつて、どこでも好きなどころの地面をちよつと掘り返して火を近づけると、すぐに炎が立つて、風に吹き消されるまで燃え続ける。その場所に拝火教徒（ゾロアスター教徒）が住む僧院がある。何年か前までは、サリヤンの魚加工業の徴税代理人をしていたソブラ＝マグンダスというインド商人が、この僧院を支援していて、当時こ

には八〇人にも上る修道士たちが暮らしていた。しかしこの商人がペルシア戦役で破産したため、僧院は資金が枯渇し、修道士たちが死に絶える一方で新人は入ってこないということになり、今日残っているのはわずか二人だけである。この修道院はペルシアの拝火教徒が建てたという、いかにももつともらしい仮説があるが、しかしこれは間違っている。我が国の東洋学者イリヤ・ベレージン（一八一八—一九六）は、ダゲスタンとザカフカスを調査した結果断言しているが、アプシロン半島（カスピ海西岸の半島）にはペルシアのゾロアスター教徒はいたためしがなく、ここに常住していたのはインド人であった。それをたとえばラングレーとかサナンヌといった学者たちがペルシア人拝火教徒と取り違えたのである。彼らの信ずる宗教も、儀式も、偶像礼拝も、言語も、故郷も、はては顔つき自体も、すべてがインド出身であることを物語っている。

僧院の敷地の中央にメインの供物台が立っている。四阿（あずまや）の四本の支柱に載った石製のように見える台である。インド人の一人が点火に取りかかった。初めに四阿の床に火を投げると、ぱっと燃え立つ。それから長い竿を使って、その火を柱のてっぺんに持つていくと、そこにもまた火が付くという次第。だが我々はこればかりでなく、彼らの祈祷式もまた見たかった。そしてそれは、あつけないほど簡単だった。世を捨てた苦行者たちは、銀で一ルーブリかそこいらの金がもらえらるれば、通例どんな旅行者のためにでも、時を選ばず、相手の望むままに聖務を執行するのだ。我々は礼拝室に入った。それは丸天井の小さな部屋だった。部屋の片隅に供物台があり、上には小さな鐘、貝殻、水の入った茶碗、青銅の小さな偶像たちがおかれていた。私は一つの像を手にとつて、これは何かとインド人に尋ねてみた。「バーバ・アダムです」と相手は答える。「じゃあ、こっちは？」「アベルです」との答

え。「じゃあ、あの三番目は？」「悪魔です！」要するにこの隠者は、自分でもよく知らないくせに、何でも頭に浮かんだことを私に喋っているのだった。

c. 『チユクIIカラガン半島とアザラシ島』⁵

【梗概】

カスピ海の半島や島を話題にしながら、船乗りの郷愁や、アザラシの生態、無造作に捕獲されるアザラシへの同情を語るエッセイ。

【テキスト】

*アザラシの生態とアザラシへの同情

カスピ海の水棲動物の中でアザラシはむろんもつとも素朴な生き物で、ほとんど手づかみで捕らえられている。たとえば夏にアザラシたちは、のんびりとくつろぎ、体を温め、そしておそらく何よりも睡眠をとるために海岸に出てくる。そうして時には、わが身に蓄えた脂で破裂しそうな格好で、死んだように眠るのだ。そうしている間に猟師たちが手に突き棒を（あるいは大槌を）持って慎重に、風下に身を置くよう心がけながら、海側からアザラシたちの背後に回り込む。群れの一番手前の一列を殴り殺せば、もはや残りの者たちはその死骸の障壁を越えることができないので、その場で全滅するのである。猟師が大槌を振りかざすと、哀れなアザラシは身を守ろうとも逃げようともせず、ただ殺害者に涙で一杯の目を向けるだけ。小さなアザラシは、人間の赤ん坊の泣き声に似たうめきさえ漏らすというこ

とである。

d. 『アストラハンのアルメニア人』。

【梗概】

春から夏のアストラハンの風物として、雪どけ、暑気、塩類土、いなご、洪水、コレラといった話題に触れた後、作者は町の市場や商店の様子を描き、さらに商業をリードしているアルメニア人とその背景に注目する。その記述には、かなりの調査と勉強の跡が見え、またオリエンタリズム臭のする好奇心が発揮されている。まずアルメニア人がアストラハンに定住した経緯に関する諸説が紹介される。さらに絹やらくだの毛を商うアルメニア人の商才、ロシア商人との対抗、居住条件をめぐる確執などが語られる。以降は文化人類学的な記述になり、アルメニア人の風俗文化、教会、婚礼、葬礼などの儀式、服装、風刺歌、民族性（目立ちたがりや、異文化の表面的模倣傾向が強調される）、娯楽（カード、ダンス、ピクニック、宴会、歌）、外見、性格の実務的側面が紹介される。

【テキスト】

* 商業の支配者としてのアルメニア人、アストラハンへの定住経緯

（アストラハンの市場は）かような雑居状態であるが、はっきりと分かるのは、買い物客が兵隊、カラムイク、タタール、ロシアの百姓と雑多なのに対して、売り手の方は大半がアルメニア人だということである。商店街を出たところの大通りでも、事情は同じだ。この通りを歩くと、まるでアルメニアの

町を歩いているような気がする。二、三人の海軍将校が馬車で通りかかり、ロシア人の役人が急ぎ足で勤めに向かい、ペルシア人が何人か、高い帽子にチョハーを着て手や爪に彩色した格好で、表情豊かな、しかし憔悴したような顔で店先に座っている。だがそのほかは全部アルメニア人なのだ。物売りもアルメニア人、歩いているのもアルメニア人、馬車で行くのも、四つ角で兄弟と立ち話しているのも、みんなアルメニア人である。ひとこと言えば、いくらかのロシア人商人とペルシア人をのぞけば、アストラハンの商業、それも主として比較的安定した、リスクの少ない商売は、すべてアルメニア人の手に握られている。これはもちろん偶然ではなく、アルメニア人の精神や気風そのものに根ざす現象であるが、それにしてもロシア人によって征服されたタタール人の町アストラハンに、いつどうしてアルメニア人が出現したのだろうか。これはむろん誰もが感じる疑問だが、答えはさほどたやすくはない。グメーリンが無邪気に根拠もなく説明しているところによれば、アルメニア人は百年以上前にロシアに移住してきたのだが、当初彼らが居住地として選んだのはカザンであり、アストラハンにやってきたのは、悪疫の後に残った者たちであるという。彼らはアストラハンの気候、ワイン、庭、ロシア当局の対応、とりわけピョートル大帝による招致に満足した結果、同郷人たちを大量にアストラハンへと呼び寄せるようになったというのだ。アルメニア地方の史蹟を調査しているシヨパンには、そもそもアストラハンのアルメニア人に関する記述は皆無である。カラムジンによれば、ドミートリー・ドンスコイ大公への復讐心に燃えたママイが、タタール、ポロヴェツ、アルメニア人を自分の軍旗の下に従えた。府主教ボグシによるタヴリア（クリミア）史には、一二六二年にアルメニアを征服したタタールが、大量の現地住民を今日のカザンとアストラハン県に移住させたたとある。ルイブーシキンはアストラハンに関

する覚え書きに、一六一九年にアルメニア、ペルシア、インドの商人たちがモズドク（北オセチアの町）とテレク河付近のステップを越えてアストラハンへと至る道を切り開いたこと、彼らが恒常的に定住するようになったのはアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の治世であったことを記している。このような短い、断片的な情報から導き出せる結論はただ一つ、すなわちアルメニア人のアストラハンへの移住は急激に起こったのではなくて徐々に生じたのであり、彼らはちようどユダヤ人がヨーロッパの海辺や交易の中心地に徐々に住み着いていったのと同様なことをアジアにおいて行ったのであって、同じ目的のためにアストラハンにも流入したのだということである。

*風俗文化

アルメニア人は自前の宗教、言語、服装、習慣、ひいてはそのアルメニア人気質をもって我が国に到来し、住み着いている。宗教の点では、アストラハンのアルメニア人はほぼすべてグレゴリオス派（単性論派）である（カトリックのアルメニア人は一〇〇人にも満たない）。アストラハンに彼らは五つの教会を持っている。大聖堂、ウスベニエ（生神女就寝）教会、ペトロフ・ポゴスト（聖ペテロ墓地教会）、聖ゲオルギー教会、そして最後に墓地である。

*教会見学 鐘、歌、ベール、十字の切り方

そうしているうちにも教会には人が満ちてきた。男が前の方に立ち、女が後ろに立っている。祈る群衆の中でとりわけ私の目を曳いたのは、聖像に近づいてろうそくを立てては引き下がっていく、白衣の

女性たちの姿であった。私は女性たちがチャドル（主としてイスラームの婦人用ベール）をかぶっているのだと推測し、きつとベールの下には慎ましい美人が隠れているのだらうと考えた。一人の顔をのぞき込むと、ちょうどチャドルがちよつと開いて、老婆の長い鼻としわだらけの顔が現れた。後に確かめたところによると、アルメニア女性でチャドルをかぶるのは、年寄りときわめて醜い女性ばかりだという。三時間ほど続いた聖体礼儀の間中ずつと、厳粛な雰囲気が厳しく保たれた。全員が恭しい面持ちで立ち、洗礼を受けた。洗礼の形は我々と同じだが、ただし右の肩から左の肩へという順序ではなく、その反対順であった。聖体礼儀が終わるまで一言として私語を交わす者も、笑みを浮かべる者も、聖堂を出る者もいなかった。

* 婚礼、葬礼

司祭が新婚夫婦を祈りで祝福し、花婿の首に細い糸を巻き付けて、端をきつく結ぶ。これは肉の交わりを抑制するしるしである。この後新郎新婦を教会に連れていき、彼らに祈りを捧げ、ぐるりと引き回し、ワインを飲ませ、最後に聖体礼儀を施す。三日の後、司祭が花婿の首の糸を解くと、夫婦は自由となる。私はこのようなことを期待して現代アストラハンのアルメニア人の結婚式に行ってみたが、彼らの縁組みや婚礼のあり方はすっかりロシア風になっており、古来の習慣の内に残っているのは新婚者の首に紐を結ぶ儀礼だけだった。この紐にはさらに教会の封印まで施すようになっていた。婚礼の後の晩には、普通新婦のもとに「姉妹」と呼ばれる者たちが集まって、新郎から新婦の身を守る番人の役を務める。これに選ばれるのは通例新婦の肉親が知り合いの未婚女性たちである。三日目の晩、司祭が現

れて封印を解き、新郎新婦が夫婦生活を許されると、ようやくこの娘たちは夫婦の家を去るのである。

*外見、性格、実務性

誰もが知るとおり、アルメニア人はほぼ全員ブルネットで、顔立ちはかなり整っており、顎ひげも口ひげも剃り、大半が美しい黒い目をして、ほとんど皆賢そうな、秘めた情熱をたたえた表情をしている。しかし諸君が好んで人間の顔に見ることを望むような、魂の明るい側面、もしそういつてよければ、道徳における紳士らしさ、すなわち高尚で繊細なる知性、人を引きつける善良さ、豊かな表情に浮かぶ夢想といったものをほのめかすような顔は、ほぼ皆無だ。アルメニア男性あるいは女性の潤いを欠いた黒い目には、文字通りドライな、卑近な現実精神が漂っている。彼らの目は、あたかもこう語っているかのようだ——私たちは金勘定もできるし、カード博打もできるし、商売の経営も、実務書類の作成もできる。私たちの体内には肉の欲望がうごめき、私たちはこの地上を愛している。しかし天上や星々、高尚な思念、夢、感情は私たちのものではないし、私たちには無縁なものだ——どのアルメニア人においても、この実際のな精神が残余の精神的能力を凌駕している結果として、次のような事実が存在する。すなわちアルメニア人の中には放蕩者も、浪費家も、乞食もない。決して額に汗するような勤勉家ではないが、ただ律儀で退屈なドイツ人を一〇人集めたくらい、計算高いのである。

e. 『タタール』⁷

【梗概】

アストラハンのタタール人に関する観察と学術資料を交えた記述。ただしアルメニア人に関してはその渡来の経緯に関心を寄せていたのに比べ、タタールについては、その（ロシア人の到来以前からの）原住性ないし先住性が問題となる。アストラハン・タタールの由来に関する諸説の比較、他地域のタタールとの比較がまず展開される。続いて、タタール人アブベケールをインフオーマントにして、彼らの生業（畜産、農業、織物、水運、荷役など）が描写されるが、このインフオーマント自身、タタールに同情的ではないようだ。記述はさらに結婚の風習（多妻制、仲人、身請け金）、ベラムとラマダンなどに及ぶが、それに先だつて、タタールをアジアの心性の体現者と捉えた上で、その弱点に関する考察が挿入されている。

【テキスト】

*原住民としてのタタール（他地域のタタールとの比較）

いずれにせよタタールはアストラハン県の原住民である。彼らはこの土地を所有し、この土地とともに征服され、そして今でもこの土地の住民の重要な一部をなしている。私自身、目下タタールの村に暮らし、貧相な作りのタタール横町を徘徊し、運河を渡るにもいわゆるタタール橋を通る。見た感じでは、この地のタタールはコストロマ、カザン、ペンザのタタールとよく似ているが、ただしアストラハン・タタールはより大柄のようだ。ブーツかオーバーシューズのような短靴を履き、長い麻のルバシカの上に刺し縫いを施したアハルク（短いカフタン）やハラート（長い上着）を羽織り、剃った頭にエルモルカ（円帽）を付けて、その上から毛皮の縁が付いた帽子をかぶって、小さくて貧弱な自分の店のあ

なりに座り込んでいる姿は、どこかの巨人族のように見える。彼らを見てみると、つついといゴゴリのサバケイヴィチの姿が思い起こされ、きつとこれらの者たちをこしらえる際にも、自然は細かな道具など用いることはせず、ただ自らの肩から切り取ったのだからと思ってしまう。一度つまむと鼻ができ、もう一度つまむと口ができ、錐ではじると目ができてといった調子で、仕上げの加工も何もなく、そのまま神の世界に解き放って、生きよと命ずるというわけだ。通りではよく、ムスリムの習わしに逆らって、頭にハラートをかぶったタタール女性を見かける。チャドルの代わりのつもりなのだが、全然きちんとかぶってはいないので、女性たちの面広の、顎の張った顔や、小さいがたいそうきれいな目や、あぐくはベシユメート（部屋着状の上着）、細いズボン、モロッコ革の靴下、突っかけ靴といったものまでも、大変よく観察できるので。

*生業（インフォーマントの談話）

「タタールの連中は教育がなくてケチです。経験のある水先案内を雇わないで、身内でやれば安上がりだと考える。地図というものも知らないから、神さまの思し召しに任せて、記憶で船を進めるわけです。荷がニジニ・ノヴゴロドからくるのは秋口で、水の少ない時期です。海風が吹いている内はまだいいが、それがやむと、よつぽど注意していないと浅瀬に乗り上げてしまう。今どき蒸気船に引つ張ってもらえばまた金がかかるから、そこで冬越しになる。ところが春になるまでには、氷で船に穴が開くというわけですわ」

*アジア的心性の弱点

以上の小景から読者もおわかりだろう。かつては戦士としてカスピ海近辺を支配し、後には商人や工場主を勤めたタタールが、今ではアストラハンの全住民の中で、カルムイクに次いでもっとも貧しい、最下級労働者の階層をなしているのだ。彼らの生活を改善してやりたいという博愛的願望がいかに強くとも、それは不可能だろう。非はアジア人の本性にあるからだ。おそらくアストラハンほどアジアとヨーロッパの両世界が間近に接している場所はない。そしてここほどはつきりと明瞭に理解できる場所はない——これまで北が東に打ち勝ってきて、そしてやがて完全に飲み込もうとしている、その理由を。知的には怠惰、宗教上は運命論者、いかなる改善能力も競争心もなく、実践的な意欲にも欠けた当地のタタール人は、いわば精神においてザリガニであり、後ずさることしかできないのだ。彼らの願いはひたすら父親が、曾祖父が暮らしていた通りに暮らすことに他ならず、それがかなわないと一切のパンのことで殴りあうしまつなのだ。

*結婚の風習

「君たちのところではハーレムがあるのか?」「あるよ」

「普通妻はたくさんいるのか?」「一人」

「一人だって?」「一人、二人もある」

「三人は?」「三人は、どうかな。三人はないだろう」

「なぜそんなに少ないんだ?」「だって、妻が多いと金がかかるんだ。身請け金を払い、妻を養い、そ

の部屋代も払い、子供も生まれるからね！　このタタールは貧乏だ。妻は一人しかいないし、一生一人だよ」

f. 『カルムイク』。

【梗概】

ヴォルガ地域のカルムイク人に関する詳細な記述。カルムイクの四種族、ヴォルガ・カルムイクの由来、ロシアへの臣従と離脱（二七―一八世紀）の経緯から語り起して、現在のカルムイクの社会構造（親族・部族構成、民族の指導者、聖職者、カーストなど）を、一種学術的な詳細さで論じようとしている。続いてラマ教とその世界観について、造物主、被造物、人間、世界の諸力、物と肉体と精神、ダライ・ラマ、カースト、罪、死（別の生）、宗教指導者、ニルヴァナなどの概念をめぐって解説しているが、それらはカルムイク研究の先達イワン・チエルカーソフの書物の草稿から学んだものである。さらには、日課、祭日、儀礼（生誕、結婚、葬儀）、家の構造、食、生業、競馬、相撲、猟、医療などの記述が続く。結果的にピーセムスキーは、アストラハンの非ロシア民族中ではカルムイクにだけ破格に長い記述を捧げているが、それはそのまま対象のエキゾチズム（ロシア人の文化感覚からの距離）の度合いを示し、ひいては著者の民俗学・社会学的な好奇心・関心の度合いを示していると言っているだろう。主として経済的な劣者であることに基づく否定しがたい差別意識は別にして、冒頭に取上げた「旅行記録（アストラハン）」でのカルムイクの外面的描写（「やけに汚らしい連中だなあ」）に比べると、視線も関心もかなり深まっているのが感じられる。カルムイク論の冒頭に、遊牧民世界に

ついで、自分の持っていたイメージと現実との差が論じられているので、その部分を引用する。

【テキスト】

*境界としてのサラトフ（定住民世界と遊牧民世界のイメージと実像）

青年期の私は、地図を見ながら、サラトフこそが我々にとつての日常的な、人間的な世界の境界だと思っていた。そこにはありふれた田舎町と、小さな寒村があり、退屈な街道が走っている。そしてその先は、何も無い自由な空間が広がり、そのただ中で野蛮で戦鬪的な種族が遊牧生活を営んでいる——そんな風に思えたのだ。彼らの畜群が膝の丈まで茂った豊かな牧草地をゆっくり歩いている。勇猛で、走ることにかけては引けをとらない騎手である彼らも、悍馬の背に乗って、自分たちのウルタのそばを歩んでいる。ウルタの中には、フェルトの覆いのかげに、色黒で漆黒の目をした妻たちや、巻き毛の子供たちの姿が見える。何人かの老人が、深い草むらに腰を下ろし、暖かな馥郁とした大気を吸いながら、冷えた馬乳酒を飲んでいる。茂った芦原をイノシシが揺らし、そうかと思うと遠くの方を、狩人たちに追われる野山羊の群れが走りすぎていく。すでに何日かこのステップ地方にいるが、なんと言うべきか、かつての私の想像のうち百万分の一でも現実に見合っていただろうか？ カスピ海に始まって先へと広がっている肥沃なステップと思つたものは、じつは塩地の丘で、ところによっては全く草も木も生えていない。仮に何か生えている場所があつたとしても、いつそ見ない方がましだ。しおれて乾いて赤茶けた植物ばかりで、ことわざにあるように、ぺんぺん草がぺんぺん草に呼びかけているような、荒涼たる景色なのだ……。豊かな水があふれていると思つたのも、ヴォルガとクマ河を別にすれば、流れ

ているのは、サルパ、エゴルイシ、マヌイシその他の貧弱な小川ばかりで、水もしよっぱくて苦く、呑むのは不可能だ。ヴォルガとクマの沿岸およびサラトフ県の境界あたり、およびドン軍団の土地にくると、この死んだような光景が幾分活気づくが、それといえどもどこか北ロシアあたりの川沿いの草場には決して勝るものではない。馥郁たる空気というのも、一年の内に列氏で上下四〇度も幅があるので、決して健康によいとは言えない。木立については語るべきこともない。生えているのは薪にさえならないサル柳や白柳ばかりで、それも何十露里も走ってやっと何本かの樹木が目に触れる程度のものである。イノシシもサイガ（レイヨウ）の群れも私は見たことがないが、話によるといるそうで、おまけにアナグマ、ジャツカル、キツネもおり、大量のウサギもいるらしい。鳥類は、ステップの鳥も水鳥も豊富で、雉、野雁、クラハリ鴨、白鳥、野鴨、どこにでもいる鶉、ペリカン、大カモメ、カモメ、サギがいる。

しかしこうした貧しい自然環境の中にも、（もしも遊牧生活を人間の生活と呼べるならば）一民族全体が暮らし、遊牧をしている。彼らは自己流の生き方にしっかりと結びつけられていて、他の生活をろくに知らないし、望みもしない。その民族とはカルムイクである。もとはモンゴル人で、四つの氏族からなり、もとも種族から離れたためにエレート、すなわちタートル語のカルマク（離脱者）と呼ばれた。そもそも彼らは四種族に別れる。ホシヨウト（勇敢なもの）という種族はチベット近辺にとどまった。ジュンガル（左翼）はジュンガル・ステップを放牧地とした。デルベト（右翼）は初め遊牧してウラルに至り、後にウラルを越えてドン河にまで至った。そして最後にトルゴウト（巨人）は、ホシヨウトやジュンガル・カルムイクと敵対したため、指導者ハルリユクに率いられて五万のユルタ集団となっ

てヴォルガの岸へとやってきたのである。

③ 小考 ピーセムスキーにおける南方表象

ピーセムスキーの描く南方は、茫漠たるヴォルガの河口、カスピ海、大都市アストラハンとアゼルバイジャン、そこに住む非ロシア諸民族によって代表される。アジア的混沌を内包したロシア帝国の巨大さに対し、作者はかなりナイーヴな驚嘆の目を向けており、一方でこの地を文明化する方法を考えながら、他方でアジア的ロシアそのものを楽しんでいく。

彼の記述の根底には「定住対遊牧」、「キリスト教対異教」「ヨーロッパとアジア」という文明的対立項が明確に存在し、前者の優越が自明視されている。非ロシア系住民の文化レベルに対する評価もこの尺度に忠実であり、イスラームのタタールや仏教徒のカルムイクよりも、キリスト教徒のアルメニア人に一目置いている（ただしその評価は、現実主義や勘定高さ⇨精神性の欠如への軽蔑と表裏している）。この裏返しで、エキゾチシズム度においては、カルムイクが他を引き離して、それは端的に彼の調査記録の長さにも反映している。

体感で得た印象と文献やインフォマントからの情報を組み合わせた彼の報告は、北部ヨーロッパ・ロシア人の先入観や好奇心がむき出しになっている分だけ臨場性があり、作者についても多くのことを語る興味深いテクストになっている。

二―二 ドンとドニエプルの間のステップ グリゴリー・ダニレフスキー

① グリゴリー・ダニレフスキー（一八二八―九〇）について

経歴

ロシア・ウクライナ作家グリゴリー・ダニレフスキーは、レフ・トルストイと同じ一八二八年、ハリコフの富裕な地主貴族の家に生まれた。モスクワ貴族学校、ペテルブルグ大学法科で学ぶが、一八四九年、ペトラシエフスキー事件の際に、同姓のニコライ・ヤコブレヴィチ・ダニレフスキー（後の『ロシアとヨーロッパ』（一八七二―）の作者）と間違えられて逮捕され、ペテロ・パウロ要塞監獄に数ヶ月拘留されるという目に遭った。一八五〇年から五七年にかけて、国民教育省特任官をつとめ、南部諸教会のアーカイヴに数次調査旅行に出向いている。五六年には、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公企画の調査旅行に参加し、アゾフ海、ドニエプル、ドン地方を担当。直接の成果として、内陸の穀物などをクリミアへ運び、塩や魚を仕入れて戻るチュマキ（*chumaki*：単数形*chumak*）と呼ばれるウクライナ農民の生態を描いた同名の記録を書いた。ただし海軍省の機関誌『海事論集』はその収録を見合わせ、同論文は『読書文庫』誌に掲載された。一八五七年、退職してハリコフの領地に居住、地主領農民の生活改善に関するハリコフ委員会の代表委員をはじめ、地域行政に貢献した。一八六八年にペテルブルグに戻り、新しく発行される内務省出版管理局の広報新聞『政府報知』副編集長に就任。

作家としての活動は一八七〇年代中期を境に二期に分かれる。前期はウクライナ地方の生活や風俗を題材にした小説群が中心で、ステップ地域を舞台に逃亡農民たちの集団の運命を描く『新ロシアの逃亡民』（一八六二）、『逃亡民故郷に帰る』（一八六三）、『新しい場所』（一八六七）の三部作が有名。物語の多くは強盗、贖金、殺人といったセンセーショナルな事件を含み込んだ活劇風だが、筋の結構や人物

造型よりも集団の生活風俗や風景の描写においてすぐれているところから、「芸術的エスノグラフィ」などとも評される。本論の『チュマキー』はルポルタージュ（オーチェルク）だが、同じ形容が当てはまる作品である。一八七八年の『ドナウのポチヨムキン』を皮切りに後期のダニレフスキーは歴史小説に熱中し、とりわけ一七世紀史に取材した作品を多く残した。南方を舞台として本領発揮とみられるのはプガチョフ反乱を描いた『黒い年』（一八八九）。一八六八年に書かれた未来小説『百年後の暮らし』、一八八〇年の『ピョートル時代のインド行』なども変わった趣向の作品。

調査の対象 ダニレフスキーが調査対象としたチュマキーは「運び屋」などとも訳される運送業者兼商人で、去勢牛に着けた特殊な荷車に内陸ステップ地帯の様々な産品を載せて黒海やアゾフ海岸まで運び、クリミアの塩や魚を仕入れて戻るのが生業とした。一六世紀から一九世紀にかけて、ウクライナで活躍したチュマキーたちは、経済活動上大きな役割を果たした。彼らの旅はきわめて長距離で、かつ危険な旅であり、遊牧民やコサックの襲撃に備えて隊列を組み、場合によっては護衛を雇い、野営の際には特殊な軍営形態をとって、荷と身体を護った。ダニレフスキーは、そうした特異な生業の様態を観察しながら、チュマキーたちの特異な世界観や死生観に迫ろうとしている。

② ダニレフスキーの調査記録『チュマキー』。梗概とテキスト紹介

【梗概】

春のウクライナ、語り手はステップの運び屋チュマキーの、ロマン・ブラブーハの村に招待される。蜃気楼の浮かぶステップの道を行くと盆地の村に出て、春の農作業が行われている。ロマンの村の外

観が描かれ、語り手は、ネコヤナギと虚勢牛とチュマキーに関する連想に駆られる。続いて、チュマキーの荷作りの模様が描かれる。地元から集めて運び、クリミアで塩や魚に換えるものには、乾燥果実（梨、林檎）、木製品（車輪、桶、車軸、頸木、椀、水入、匙、手桶、荷車の諸部品）、陶器、食料品（ウオトカ、油、乾パン）、呉服、穀物（小麦、黍、亜麻）といったものがある。チュマキーの間にも階層分化が進み、体を資本に働く者の他に、投資家に回るものが出てきたことが語られる。

以降はチュマキーの旅を時系列に沿って追いながら、その様々な側面や予想される出来事が語られていく。春のチュマキーの門出と守り神、各自が持つて行く二枚のシャツの使い道、道連れに連れて行く雄鶏、ステップの変容（ゴーゴリが描いたような広大無辺のウクライナ式草原から、人の手で耕作されたロシア式の農地へ）など。続けて、一日三〇キロのペースで進む旅の実態、人の食事、牛の食事、牛に食わせてはならぬもの、牧草代のこと、旅の経費の高騰ぶり、野営の様子などが語られる。いよいよ旅が終わり、手に入れた商品の支払い（通関）を済ませると、帰り道となる。主なテーマは道中に予測される不幸な出来事で、ハタリスなどの獣害、病気、途上死、遺言、墓などが話題にされる。ウクライナの泥濘の中を、チュマキーが再び帰郷すると、最後には滅びゆくチュマキーの運命についてのエピソード的な叙述が続く。

以下では、できる限り具体的な風俗に触れている箇所を引用する。

【テキスト】

*ネコヤナギと虚勢牛とチュマキーに関する連想

ウクライナのネコヤナギには何か特別に心惹かれるものがある。

ステップでのその生命力は驚くべきものだ。怠け者の百姓が畑や水堰の端に棒杭を突き刺しっぱなしにしておいたり、考え事をして棒に寄りかかったままそれを地面から抜くの忘れて放つておいたりすると、そこからネコヤナギがよきよきと伸びて、五、六年もすると畑も池も小屋も覆うほどに茂るのである。広い荒野の大道に日陰作りと目の慰めのために植えられた、かわいそうなひとりぼっちのネコヤナギが、吹雪や荒天にさらされている姿は、思わず胸を打つ。すでに皆が毛皮外套にくるまり、ほんの時々だけ玄関に鼻先を出すような秋の日に、ネコヤナギの枝が騒いでいる様は、過ぎ去った夏を思い出させてひとしお胸に迫るようだ。暖かな宵には田舎の家族がネコヤナギの下に座り込み、食事をしていることがある。歌

では、ウクライナの動乱の時代に、子を失った母や夫を亡くした新妻が、ネコヤナギに語りかけている。南ロシアのある民話には、戦争で死んだ兄の妹が、嘆きの果てにネコヤナギに変身するという民衆の想像の世界が描かれている。最後にネコヤナギは、ステップの運び屋チュマキーや去勢牛ともある種のつながりがある。ステップのあらゆる困難や災難に見舞われながら、チュマキーも去勢牛もネコヤナギも、驚くべき生命力を発揮する。去勢牛とチュマキーは、道中家も金もない中で、寒さや嵐から身を隠し、じつと身を寄せ合って過ごす。重い足取りで、かるうじて脚を動かしながら、一方はくびきの下



で、もう一方はそのすぐ脇で、手に持った鞭をただ空中で振りつつ、両者は進んでいく。そうして気がつかぬ間に何千露里も踏破しているのだ。ネコヤナギは、切り株から生えたり棒杭から生えたり、生え方もまちまちなら、貧しい土地、有害な土地、二股道、軟泥の堰の端など、生える場所もまちまちだが、同じく我慢強く育っていつて、すべてに耐えていく。歌で去勢牛、チュマキー、ネコヤナギが切り離せない連想関係にあるのも不思議ではない。去勢牛のいるところにチュマキーがおり、チュマキーがいるところにはネコヤナギがあるのだ。

*チュマキーの階層分化（二元縮めに当たる富農層の出現）

いまでは少し裕福になったチュマキーは、気ままで野趣に満ちた自分の商売を突入りだけで判断し、農耕仕事や小さな取引と一緒にしている。こういうチュマキーはもはや怠け癖が付いてしまって、もはや父祖伝来のタールを塗り込めたルバシカやニツカポツカーなぞ着ないし、去勢牛を連れて長旅に出かけ、様々な難儀や災いを味わうようなまねもしない。そうしたことをさせるために、毎年二〇人とか四〇人とかの働き手を雇っていて、彼らに小銭を払い、荷を持たせて送り出し、自分は儲けを吸い上げるといふわけだ。・・・そんな現代版のチュマキー、出来損ないの金貸し、投機師のような奴がミャコフスキー・フートルのそばにいての私は知っている。アンドレイ・イワーノヴィチ・シズヨンという男で、もう一五年も自分では荷運びをせず、家において儲けた金で仲買商売をしている。・・・南の方から魚や塩が運ばれてくると、彼はそれを売りさばく。そのためにはまるで本物の商人のように、山と積んだ荷を引っ張って、一年中近隣の市場を回って歩くのだ。その様子はさながら陽気で威勢のいい、頭

の回る富農様で、先祖のチュマキーには似ても似つかない。甥っ子の妻は更紗の服に絹のプラトークで歩いている。本人はすでに茶をたしなむようになり、また必要な相手とはマメに酒を飲んでゐる。寝るのは必ず柔らかいベッド、鎧戸を閉ざした部屋の中に限る。・・・（私が尋ねていった時）シズヨーンは本当に風呂に入つてくつろいでいた。ウクライナの文明開化も、ついにここまで至つたというわけだ。

*チュマキーの門出と守り神

主人のチュマキーは、うつすらと空が白み始めたころにもう表階段に出ると、荷積みを終えた荷車の列と、脇の、庭の片隅で干し草を食っている去勢牛たちを一瞥し、それから使用人たちのところへ行く。「おい、若い衆よ！ 起きるんだ、寝てばかりいるとぐうたらになるぞ！ 一冬、寝て暮らしたんだからな！ さ



あ、早く、パヴロ、ミトロ！ ドロシ、テリヨシコ！ 荷車に油をくれて、牛どもに水を飲ませて、それで出発だ」使用人たちは飛び起きる。ただでさえ一晩中、よく眠れなかつたのだ。愛しい娘を残していく者もいれば、一冬のみびりと暖めて、できれば生涯離れたくないような、なつかしい場所を捨てていく者もいるのだ。荷馬車の列ごとにオデイギトリアの生神女への祈祷が行われる。これは古い伝説によれば、チュマキーの守護者なのである¹⁰。この家の主婦が最後の食事を用意している間に、主人の方は納屋で、旅行中の食糧としてあらかじめ用意しておいた乾パン、穀粉、きび、獣脂、塩および車輪に塗るタールを量り分けている。門が開く音がする。去勢牛たちは特別かいがいしく世話をされ、井戸の

冷たい水を飲まされている。車軸に油を塗っている者もいる。隣人やこの界隈の友人たちが門出の見送りに集まってくる。一方、主人は楽しげに荷車や牛たちの間を歩き回っている。そこには彼自身の二頭立ても混じっていて、通例それは一番しゃれた姿をしている。くびきには色のついた模様が彫り込んであり、もしも主人がチェルニーゴフのチュマキーか裕福なハリコフ者だったなら、金箔で「キンキラ」に飾り立てられている。去勢牛の方も一番大きなやつで、角も大きく張っており、色は黒褐色に白い斑が入ったやつか、あるいは全身漆黒。まるで二頭の巨大な熊のようだ。手綱は綱ではなく革帯である。

*二枚のシャツ

チュマキーが旅に持って行くルバシカは二枚だけで、これには独特の背景がある。道中彼は一枚のルバシカで過ごし、一度も着替えることなく、そのまま着た切り雀で帰ってくる。雨や埃や病毒やブヨを避けるため、ルバシカは二ツカボツカーとともに直ちにタールが塗りたくられる。そのために鈍重で動きが遅く真つ黒に日焼けした道中のチュマキーの姿は、遠くから見ると鎧具足でがんじがらめになった、古の騎士のように見えるのだ。ところでもう一枚のルバシカには胸に迫るような役割がある。チュマキーがこれを着るのは、道中で客死したときなのである。

*道連れの雄鶏

人氣のない荒野の夜中、チュマキーが街道を離れて牛にえさを食わせているときなど、この雄鶏の鳴き声で、どこに荷車があるのかが知れるのだ。それはまた時間を教えてくれる。いまは夜、いまは深夜、もうじき夜明けだ、といったことを告げてくれるのだ。しかしおそらくさすらい人たちが雄鶏をかわいがる一番の理由は、人里離れたステップで、荒野に高らかな声をとどろかす雄鶏が、故郷の村や家を思い起こさせてくれることではないだろうか。厳めしく不遜な顔つきで埃まみれの荷車に陣取り、高みから同行者を観察し、停泊所では周囲を歩き回って、自分用にとっておかれた選り抜きのえさを車輪の下でついばんでいる。中には、この雄鶏が道ばたの悪魔から守ってくれていると思っている者もいる。荷車部隊の寵児でありアイドルであるこうした雄鶏は、場合によっては一〇年、二二年と長生きして、夏が来るたびに何千露りもの旅をするのだ。しかし時には、ステップ地帯の野営地の、辺鄙な小村かどこかのメノナイト教徒集落の旅籠屋で、農業が盛んで宿屋の付近を雌鳥の群れが歩き回ったりしていると、この羽の生えたサルタン君は不意に荷車から飛び降りて、巢ごもりの雌鳥の集団に突進していく。そうしてもしも首尾よく捕まえないと、荷車隊が



出発するときにはもう影も形もないということになるのだ。

*ステップの変容（ロシア化）



ゴーゴリが賛美したウクライナのステップは、この五〇年間でひどく変わった。それはもはや、かのタラス・ブーリバが息子たちを引き連れて、「海原のごとき草原」の果ても見えぬまま、人家にも道路にも出くわすことなく走っていたような、何も無い広大な空間ではない。まだ八〇年前には、政府が住民に穀物栽培を強いながら、知事たちにはタールやザポロージェ・コサックに対する厳重な警戒を指令し、国境地帯には絶えず大砲や火薬が送られ、住民は今にも敵がやってきて、村々に放火して回るのではないかと怯えていたこの土地も、今では銃を持つ手に鎌が握られ、大砲は犁に取って代われ、荒野だったところが耕して種を植えた畑に変わっているのだ。ステップには縦横に街道や村道が走っている。草地は無数の羊の群れに踏みしだかれ、「休耕地」の名で呼ばれている。果てしない草地も人の足で踏まれていて、もはやかつてのように黄色のハリエニシダや白いウマゴヤシが絵のように顔を出しているわけではない。未開のウクライナのステップが、単なる静かなロシアの野に変わっているのだ。ただいまだに美しい情景は残っている。春、いろんな草が花を付ける頃には、ステップは美しい装いに身

を包み、旅人は思わず足を止めて、タラス・ブリーバやヴィイの時代に戻った気分を味わう。その季節とりわけきれいなのは、真っ赤なキンポウゲや野生のチュウリップである。よく耕された巨大なステップの小麦畑は、大口シヤ人には想像しがたいものであるが、これもまた何か格別胸に迫る光景である。豊かな農の発展に敬意を表して、ウクライナ人は穀物の植えられたステップを「ツァリーナ」の名で呼び、その「ツァリーナ」の前では思わず帽子を取って頭を垂れるのだ。チュマキーは農耕の発展で誰よりも一番被害を受けている。草原が減って牛に食わせる道草代が高騰したからだ。

*旅の経費の高騰

南口シヤには何でも商売という気風が横溢している。チュマキーに向かって今どきただで手に入るものはないかと聞いてみるがいい。「何でもかんでも買い占められて、タダなのは空（そら）だけさ！」とも言ふことだろう。そして実際、水場も有料、草場も有料、橋も、渡し船も有料なのだ。場所によつては、荷を積む前にまず何らかの町への奉仕義務を課すところもある。たとえば町のごみを去勢牛に担がせて運びだし、石や砂を持って帰る、といった作業である。

*野営の様子

チュマキーの野営の光景ほど絵になるものはない。荷車は一辺が五台から一〇台連なるような四角形に並べられる。その中の静かな場所に焚き火を起こし、焚き火の上に鍋をぶら下げた三脚を据える。去勢牛たちは夜番が街道を遠く外れた、あまり踏みつぶされていない草原へと追っていく。火が燃え上が

ると、ほこりまみれで日に焼けた、黒々とした顔が浮かび上がる。粥が煮えるまでの間、まだ人々の疲れた目を睡魔が閉ざさぬうちに、昔の、かつてのチュマキー暮らしの年月が話題に上り、民話が語られ、儲けの計算がなされ、親類のことが思い出される。荷車が壊れた者は、車輪を直したり、車軸を付け替えたり、リムやスポークを縄で縛ったり、新しいキングピンをはめ込んだりしている。明け方に野営の場所をみるといつもかなりの木端やカンナくずが残っているが、これはチュマキーの荷車がつねにできる悪いものだというのを雄弁に物語っている。「道具が悪いと息抜きもできない」とことわざも言っている。ついに修理が終わり、夜食も終わって、皆眠りに就く。

*通関

ペレコープの仕切り場に着くと、チュマキーは一列に並ばなくてはならない。役人たちが、各自の荷車の塩積載可能量を測定して、各塩湖(?)への発注状を発行するのだ。卸場ではその発注状に従って、無料で塩を引き渡してくれる。料金は帰りに再度仕切り場の門を通る際に、管理部が徴収するのだ。ときにはここに数百台の荷車がたまってしまう。そうになると、餌も水も高騰するので、チュマキーは先を争って、何とか早く金を払って出発しようとする。何週間も待たされる者さえいるのだ。

*帰り道

さて、塩の支払いが済み、荷が積まれて、チュマキーは帰途に就く。ある者はまっすぐとんぼ返りで、何千もの村や集落がある故郷を目指す。別の者はドニエプルの倉庫地区へ塩を運ぶ。塩はそこから

水路で、いくつもの堰を超えて西部諸県およびポーランド王国へと運ばれて行くのだ。ドニエプルの主要な塩集積場の一つが、クレメンチューグの郊外のクリュコフ・ポサードだ。ここは六月と七月は文字通りチュマキーの王国となる。ここで彼らは塩を倉庫に納め、現金を手に入れ、しばしばその場ですってんてんになるまで飲んでしまう。そんなとき、おけらになったチュマキーは、なけなしの銭で迎え酒をしながら広場に座り込み、丈の高い帽子を耳までかぶった格好で、涙ながらに有名なチュマキーの歌を歌うのだ。

チュマキーは酒を飲む／広場にしゃがんでよ／チュマキーは飲み尽くす／すっからかんだよ／（チュマキー、チュマキー／もう夜が明ける…と「与作」の節で歌えそうである＝訳者）

帰り道にはチュマキーは家を出るときよりも積み荷が重くなる。塩や魚は木製品よりも容積に対する重量比が大きく、しかも積み荷の嵩（かさ）が減って低い所に収まるため、南に来るときに運んだ荷物、例えば穀類に比べて運搬時の揺れが少なくて済むからだ。

*途上死（コサックとチュマキーの類似）、遺言、墓

ステップにおけるチュマキーの死は実に胸を打つ。ちょうど古いコサックの民謡に、異郷で敵と戦って倒れたコサックの死が歌われたように、チュマキーの死は何十もの良きウクライナの歌に歌われている。

ウクライナの詩的生活において、チュマキーはすっからか、かつてコサックが占めていた場を奪ってしまった。今やチュマキーこそがステップの歌の主人公である。実際、長くつらい旅路に就きながら、悪

天候にも、沼地にも、ありとあらゆる風土病にも、特に予防の措置もしなければ身を守る手段も持たないチュマキーは、しばしばあつけなく死んでしまうことがある。街道には薬屋はないし、医者も見つからないからだ。住民の少ないステップ地域では、時には五〇露里四方に土地のお助け婆さん、魔女まがい、医者まがいをひつくるめた、いわゆる「まじない女」が一人も見つからないこともある。暑気に負けて冷たい井戸水を飲みすぎたり、西瓜やまくわ瓜をむやみに食ったり、あるいはただ体が冷えて風邪をひいたりただだけで、もはやチュマキーは頭を垂れてふさぎこみ、黙って自分の運命を迎える準備をするのだ。仲間が同情して、心配そうにその様子をうかがっている。本人はもはや食することも飲むこともせず、じつと荷車の上に横たわっている。痩せた体は死人のように青ざめ、寝返りを打つのもおぼつかない。髪はくしゃくしゃだ。ただときたま、水で舌を湿らせてくれと頼む。その果てに時折、夕暮れ時に、踏みならされたチュマキー「街道」から一〇歩ほど外れた窪地のさなかに、じつと立ちつくすチュマキーの集団と、脇の街道にたたずむ、牛を外された荷車を見かけることになるのである。悲しい儀式の準備が大急ぎで進められている。死に行く者はすでに体を清められ、髪を梳かれ、予備に持ってきたきれいなルバシカを着せられている。しばしば遠からぬところで、仲間がまだ生きている彼の墓穴を掘っている。彼は長い上衣を広げた上に横たわり、枕元には干し草の房か水の入った小樽が置かれている。彼の前に立つのは一番親しい仲間か、親戚か、幼馴染の「義兄弟」だ。ほかの者たちはこの時は脇に退き、敬虔な顔で待機している。司祭がいいため、罪の懺悔は友に対して行うのだ。

「友よ、永遠の許しがほしい。あのネミロヴォの村で、おれは一桶盗みをした。そしてわがガンノフカ村には、おれの情婦がいる。俺はあいつの身を滅ぼした。そのうえこうなったら、もうあいつは生き

ていけまい！ あそこの森に俺の金が三ルーブリ埋めてある。掘り起こして、二ルーブリをあの女にやり、一ルーブリを供養料として坊さんにやってくれ。それから、おれはまだデヨムカやピョートルのやつをひどい言葉で罵ったし、死んだお袋にも暴言を吐いた……酔って妹を二度殴った……ニツカボツカーはプロコペンコの居酒屋に質入れしてある……友よ、俺はいろんな行いでも、言葉でも、考えでも罪を犯してきた。神に祈り、坊さんに頼んで、弔いの祈りをしてくれ……牛たちのことは……大事にしてやってくれ……売らないでくれ……大事にしてやってくれ」いとしい去勢牛のこと、友のこと、数多くの旅のことを考えながら、彼の魂は旅立っていく。友人たちが集まってきて、十字を切り、新しい墓に彼の体を納め、一つかみずつ土をかけ、墓を埋め、その上に棒を立てて、麻のハンカチを先に結え付ける。

*ウクライナの泥

ポルタワとハリコフの泥濘のことは誰でも知っている。南の道を行く郵便馬車は、何週間も遅れることがある。私は五頭の頑健なクールスクの馬をつけた駆伝馬車に、一切積み荷なしで乗って、一時間にやっと二露里か一露里半しか進めなかったくらいだ。ペレコープからセヴァストポリにかけて泥にはまった何百頭もの去勢牛が溺れかかって凍えているが、この光景もみなに知られている。グレビョンカはポルタワの役人たちが職場に通うのに、船もどきのオーバーシューズを履くさまを描写している。私は台所と家との間でソースの皿を手にしたまま泥にはまった召使を見たことがあるが、手元に板がなかったものだから、彼とソースを救うためには娘部屋にあった木の衝立を裂いて、その半分を表階段か

ら溺れかけた召使のもとへと差し出してやらなければならなかった。しかもその間、食卓に着いたこの家の家族の大騒ぎがやまなかつたのである。車輪が泥だらけになり、もはや車を回転させて進むよりも橇のように滑らすしかないようになった荷車を運んでいる哀れな去勢牛たち——その姿をみると胸が張り裂けそうになる。そこにさらに、不意に冷え込みがやってきて、雪もなく寒風が吹きすさんでいる様子を想像していただきたい。じきにいわゆる薄氷、あるいは霜氷が張りだす。ステップの街道の巨大な空間に、ただ一筋のわだち道が残るだけで、しかもその深さはしばしば七〇センチにもなるのだ。そこから外れるのは不可能だが、その両脇も、並木道の側溝か、冷えて凍って波型の石状に固まった泥の世界しかない。五〇台もの荷車にそれぞれ五〇か六〇プードの荷を乗せたチュマキーの隊列がふた組、彷徨して遅れた挙句、こんな路上で出くわした時のことをご想像いただきたい。ただし経験豊かなチュマキーは、できる限りこういう時期には旅をしないようにする。秋にいわゆる湿っぽい天気になったなと思つた頃には、彼らはすでに何もかも終えて、家にこもつているのである。

*滅びゆくチュマキー

「ああ、兄弟たちよ！ 俺たちに好いことはないぞ！ 餌代は高い。水場はユダヤ人かモスクワつぼが借り受けて商売している。塩の代金も昔の三倍する。どうして生きていけばいい？ 一番問題なのは、委員会のやつらがやってきて、ステップに棒を立てては糸を張り、古代墳墓に上つてはあたりを見回し、小川まで測量していることだ。噂では、ハリコフから海岸まで、特別な道を作つて、馬じゃなく火力で走る算段をしているそうじゃないか。俺たちはおしまいだ……」

③ 小考 ダニレフスキーの描く南方

ダニレフスキーのルポルタージュは、世態風俗の観察描写と物語絵巻的な構成を結びつけた「芸術的エスノグラフィ」で、チュマキーの村の遠景、近景描写に始まり、生業である塩・魚の買い出しと運搬に焦点を絞って、チュマキーたちが経験する典型的な出来事を、季節と歳月を追う形で紹介している。語り口に横溢しているのは、苛酷なチュマキーの人生への共感とウクライナの自然への思い入れ、および開発と資本主義化の流れの中で変化を強いられている生活伝統を惜しむ、保守的ヒューマニズムの調子である。荷車の先頭で威張りかえる雄鶏や泥濘にはまった召使いなどの描写にはユーモアが、草原で死んだチュマキーの葬送の場面には悲哀が、ウクライナの荒野がロシアの野のように開発され、独占されていく傍らで移動費用の高騰に悲鳴を上げるチュマキーの描写には、皮肉と批判の目が感じられるが、それぞれが、いかにも後にゼムストヴォオや地方行政の世界で活躍するリベラルな地主貴族の良識の枠に収まっているように見える。観察が芸術表現へと展開する手前でいささか紋切り型の抒情に絡め取られている印象。いずれにせよダニレフスキーの南方はステップに代表され、苛酷さ、美しさ、強靱さ、はかなさなど際立った両義性によってヨーロッパ的「文明」に対比されている。チュマキーがコサックと同じ詩的位置を占めるといふ指摘も納得がいく。

- 1 以下、このプロジェクトの経緯については、主として次の資料に依拠した。S. V. Maksimov, *Literaturnaia ekspeditsiia (po arkhivnym dokumentam i lichnym vospominaniam)*, Russkaia mysl', 1890, No. 2, pp. 17-50.
- 2 望月哲男「三つのヴォルガ像（一八五六年の文人調査旅行から）」『スラブ・ユーラシア研究報告集 4：文化空間としてのヴォルガ』（北海道大学スラブ研究センター、二〇一二）六九—一〇四頁。
- Tetsuo Mochizuki, 《Opyt literaturnogo osvoeniia landshafu: po povodu odnoi literaturnoi ekspeditsii po Povolzh'iu v doreformnoi Rossii》 Tadashi Nakamura (ed) *Imagining the Landscape: Views from Armenia and Japan*. Comparative Studies on Regional Powers No.12, February, 2013, pp. 27-41.
- 3 A. F. Pisenskii, *Puchebye ocherki (Astrakhan)*, Morskoi sbornik, febral' 1857, pp. 235-256.
- 4 A. F. Pisenskii, *Morskije poezdki: 2. Poezdka v Baku*, Morskoi sbornik, aprel' 1857, pp. 235-246.
- 5 A. F. Pisenskii, *Morskije poezdki: 3. Tiuk-Karaganskii poluostrov i Trulen'i ostrova*, Morskoi sbornik, aprel' 1857, pp. 246-251.
- 6 A. F. Pisenskii, *Astrakhanskije armiane (iz putevykh zapisok)*, Biblioteka dlia chleniia, 1858, No.10, Otd. 1, 3-ia paginatsiia, pp. 1-16.
- 7 A. F. Pisenskii, *Tatary*, Biblioteka dlia chleniia, 1858, No.11, Otd. 1, 6-ia paginatsiia, pp. 1-10.
- 8 A. F. Pisenskii, *Kalnyi*, Biblioteka dlia chleniia, 1860, No.1, Otd. 1, 4-ia paginatsiia, pp. 1-34.
- 9 G. P. Danilevskii, *Chumaki. Iz putevykh zametok 1856 goda o pravakh i obychaiakh ukrainских chumakov*, G. P. Danilevskii, *Sochineniia*, tom 1, 1901, Russkie ocherki, t.1, Moskva: Goc. izd., 1956, (s sokrascheniem).
- 10 オデッセイトリア型の聖母子像は聖母の片手が道を指し示しているを解釈されることがあり、道案内＝旅人の導き手＝ナムマキーの守護神とこの論理にあつて。

